

国際島嶼教育研究センターにおける地域との連携

国際島嶼教育研究センター長 河合 溪

はじめに

「日本は島国である」というフレーズは、どの人も小さなころからよく聞いてきたと思います。定義にもよりますが、日本には6852の島があり、大小さまざまな大きさの島によって形成されています。そのような環境において、鹿児島県は日本で2番目に島が多い島嶼県で、605の島（人が住んでいる島は28）が点在しています。そして、鹿児島県の地理的特徴として「南北600kmに広がっている」という点がよく指摘されますが、この長さの多くの距離を占めているのが薩南諸島です。薩南諸島は、北から大隅諸島、トカラ列島、奄美群島によって成り立っています。また、鹿児島県の北部には甕島列島があります。これらの島々には自然や文化において非常に多様なものがあります。例えば、大隅諸島に含まれる屋久島はすでに世界自然遺産に登録され、奄美群島は生物多様性の高さが認められ、近々世界自然遺産登録を目指している地域でもあります。また、鹿児島は本土最南端に位置し、アジア太平洋へと広がっていく地域に位置するという地理的特徴もあります。

このような地域にある鹿児島大学にとって「島」は、鹿児島を考えていくうえで非常に重要なキーワードになっていると言えます。私が所属する国際島嶼教育研究センター（島嶼研）は鹿児島大学憲章に基づき、「鹿児島県島嶼域～アジア・太平洋島嶼域」における鹿児島大学の教育および研究戦略のコアとしての役割を果たす施設とし、将来的には、国内外の教育・研究者が集結可能で情報発信力のある全国共同利用・共同研究施設としての発展を目指しています。そのため、島嶼研はこのような鹿児島を含むアジア太平洋における島嶼域を対象に文理融合的かつ分野横断的なアプローチで教育・研究、そして地域貢献を行っています。

現在世界には、環境問題、環境保全、領土問題、持続的発展など多岐にわたる課題や問題が多く存在します。これらの問題は鹿児島を含むアジア太平洋の島嶼においても共通する問題になっています。そのため、島嶼研では、このような問題にたいして鹿児島を含むアジア太平洋島嶼域において研究を行ない、これらの問題に対する適応策を地域

から世界へ提言しています。これにより国内の問題には国際的な視点で研究を行ない、一方、国内で得た成果はアジア太平洋での共通する問題に応用しています。同時に、その研究成果は書籍の出版やシンポジウム・公開講座・自然観察会などを通し地域に還元しています。

島嶼研は、近年は鹿児島県島嶼域において活発に活動しています。平成26年には奄美群島の12の市町村から成る奄美群島広域事務組合と鹿児島大学は包括連携協定を締結し、平成27年に奄美市の協力のもと、奄美市内に教員が常駐する国際島嶼教育研究センター奄美分室を設置しました。現在は、この施設において奄美群島を中心に研究プロジェクトを推進し、その活動をもとにシンポジウム・公開講座・自然観察会などを通し、豊かな郷土に貢献できるように研究成果を地域に還元しています。

島嶼研ではこのように、アジア太平洋と鹿児島県島嶼域を中心とした活動を行っていますが、ここでは平成27-28年度に行った鹿児島県島嶼域での活動を中心に、「地域と大学の連携活動」について紹介をしていきたいと思います。

1. 国際島嶼教育研究センター奄美分室

平成27年に島嶼研は奄美市内に国際島嶼教育研究センター奄美分室を設置しました。そして、奄美群島を中心に研究プロジェクトを推進し、シンポジウム・公開講座・自然観察会などを通し地域にその成果を還元しています。

この奄美分室を拠点とした活動の一つとして、奄美群島を中心とした薩南諸島の生物多様性の維持機構を解明し、教育研究拠点（奄美分室）を強化する目的で、平成27年には文部科学省特別経費プロジェクト「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育拠点形成」、そして、平成28年から平成31年までは「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育拠点整備」として継続推進しています。このプロジェクトでは、奄美市が連携先になり、奄美市と共に奄美群島広域事務組合にも運営委員として参加していただき、地域に密着したプロジェクトとして推進しています。



写真1 奄美分室開所式

このプロジェクトでは鹿児島大学の約50名の教員が地域と連携し、分野横断的に生物多様性維持機構を研究し、その成果を一般市民に還元するというのが大きなテーマです。

このプロジェクトの具体的な活動の一つとして、平成27年5月から平成28年4月にかけて地元新聞社と連携し、毎週「生物多様性と保全—奄美群島を例に—」というコラムを参加者全員が執筆し、これらをブックレット『生物多様性と保全—奄美群島を例に—』(上下)(北斗書房)2冊にまとめ出版しました。

地域と連携したその他の活動としては、毎月鹿児島市で行われている研究会を奄美分室とインターネットでつなぎ奄美大島の島民が自由に参加可能にした活動、市民に向けた「奄美の干潟の生物多様性観察会」(平成27年9月26日)、「奄美群島の植物観察会」(平成27年12月23日)、そして「奄美群島の生物多様性に関するシンポジウム」(平成28年2月21日)開催などの活動を行いました。これらの活動は、奄美群島広域事務組合と奄美市以外に、地元の自然科学系の研究会や高等学校の生物部、そして教育委員会などと連携し開催しました。

また、常駐している専任教員と共に、島嶼研外国人客員教授が地元の高校に行き講演会の開催や高校生に学術的かつ国際的な視点からのアドバイスも行っています。

2. 研究活動を通じた地域との連携

鹿児島県島嶼には、世界自然遺産である屋久島や今後世界自然遺産登録を目指す奄美群島などに代表される生物多様性や島嶼に代表される文化の多様性が高い地域が多く、

世界的に注目を集めている地域が多くあります。しかし、この地域を学術的視点から容易に紹介する書籍が多くないのが現状です。特に、このような視点で、この地域を海外に紹介する書籍はほとんどないのが現状です。

そこで、島嶼研では平成25年度に奄美群島、平成26年度に大隅諸島、平成27年度にトカラ列島、平成29年度(予定)に長島・甕島列島を対象に学術調査を行い、その最新の成果を英語圏の一般の人に紹介し、海外の人が気軽に手に取れる書籍の刊行を行っています。これにより、世界のどこからでもこの地域の情報を手に取れるように情報を発信しています。そして、これらの書籍は、今後想定される世界各国からの観光客の方のこの地域の理解に大いに貢献すると考えています。以下がすでに出版された書籍と今後出版が予定されている書籍です。

- 『The Islands of Kagoshima』(Hokuto Publishing, 2015).
- 『The Amami Islands』(Hokuto Publishing, 2016).
- 『The Osumi Islands』(平成28年度予定).
- 『The Tokara Islands』(平成29年度予定).
- 『The Nagashima-Koshiki Islands』(平成30年度予定).

これらの研究成果は、日本語による一般市民にも理解しやすい『鹿児島島の島々-文化と社会・産業・自然-』(南方新社, 2016)としても出版しました。これらの英語・日本語の書籍は、各新聞において紹介されるとともに新聞の書評にも取り上げられ、とても良い評価を得ています。

一方、鹿児島大学では地理的・歴史的に鹿児島県島嶼における様々な分野での研究蓄積がありますが、それらを一般市民に伝える手段があまりありませんでした。そこで、島嶼研では各専門的研究を高校生や大学生にもわかりやすく解説をした書籍『鹿児島大学島嶼研ブックレット』シリーズを刊行しました(現在5巻)。この出版は今後も継続し出版を行っていく予定です。以下がすでに出版されたタイトルです。

- 『鹿児島島の離島のおじゃま虫』(野田伸一), 北斗書房, 2015.
- 『九州広域列島論—ネシアの主人公とタイムカプセルの輝き—』(長嶋俊介), 北斗書房, 2015.
- 『鹿児島島の離島の火山』(小林哲夫), 北斗書房, 2016.
- 『生物多様性と保全—奄美群島を例に—(上)』陸上植物・陸上動物・基礎編(鈴木英治・桑原季雄・平 瑞樹・山本智子・坂巻祥孝・河合 溪編), 北斗書房, 2016.
- 『生物多様性と保全—奄美群島を例に—(下)』水圏・

人と自然編（鈴木英治・桑原季雄・平 瑞樹・山本智子・坂巻祥孝・河合 溪編）、北斗書房、2016。

3. 公開講座・シンポジウム・研究会を通じた地域との連携

鹿児島県島嶼域における学術成果は毎月郡元キャンパスにおいて一般市民にも公開されている研究会、そして年に数回開催される公開講座やシンポジウムにおいてその研究成果を地域に還元しています。また、国際シンポジウムを鹿児島で開催することで、国際的な視点での、問題解決への提言も行っています。近年の公開講座やシンポジウムに関する実績は以下です。

シンポジウム

- 「島の魚と私たちのこれから―鹿児島県島嶼域における魚類の多様性と持続的な利用へ向けた取り組み―」
日時：平成27年11月28日（土）13時30分-17時
- 「Challenge of Integrated Disciplinary Research-Natural Resources Use by People in the Pacific Islands-」
日時：平成27年2月7日（土）13：00-17：00
- 「島嶼災害の特徴と防災」
日時：平成27年1月31日（土）13：00-17：00
- 「島を結ぶ学びと連携―地元学と島嶼学の同時展開―」
日時：平成26年10月4日（土）13：00-17：00



写真2：奄美大島住用干潟における観察会の様子

- 「地域を変える力～情報技術による島の振興～」
日時：平成25年7月6日（土）13：00-17：00
- 「柳田國男の民俗学と東アジアの「海上の道」を問い直す」
日時：平成25年7月2日（火）12：30-16：30
公開講座
- 「環境変動に伴う島の生物と人の健康―現状と将来―」
日時：平成25年12月14日（土）13:30-16:30

4. 地域との連携における課題と可能性

ここでは今まで紹介してきた活動から考えられる地域と大学の連携における課題と今後の可能性について考えてみます。

課題については以下の5つの点から考えてみます。

第一に「広報努力の必要性」があげられます。様々な地域還元のを機会を大学が企画しても、それらの活動が多くの人に十分に伝わっていないことが多く、参加者からより一層の広報活動の必要性を指摘されることがあります。そのため、新聞、ラジオ、テレビなどだけでなく、SNSなどを利用した幅広い広報活動が必要になってくると思います。

第二に「参加者がいつも同じ」という点があげられます。多くの公開講座や観察会などを行った際にお会いする参加者を見てみると、参加する人が毎回同じ人であることが多



写真3：奄美大島において開催されたシンポジウムの様子

いことに気が付きます。これは、近年になり多様な趣味を含む様々な活動を行う機会が多くなり、大学における地域活動への参加もその中の一つとなっている可能性が考えられます。従って、そのような活動に興味を持っている人が固定化していると考えられます。そのため、多様な活動を企画し広報活動を活発にし、多くの人に興味を持ってもらうことで、これらの現状を打破できるのではないかと考えられます。そして、総合大学である鹿児島大学は、この様な観点から貢献できると思います。

第三に「提供する側が参加者や時代のニーズにこたえるような活動を提案できているか」という点があげられます。世界を見ると英国のEUからの離脱や、米国の大統領選挙の結果など私たちの想像をはるかに超えることが日々起こっています。また、科学では2016年に大隅良典博士がオートファジーの研究成果でノーベル生理学・医学賞を受賞するなど、様々な新たな研究成果が報告されています。このように今の時代は情報が多岐にわたり、そして新たな成果が多く出てきており、一般の方の興味も幅広くなってきています。そのため、大学における活動においても、このような時代の変化やニーズに合わせた活動を企画していかないといけないと思います。

第四に「大学が地域に身近な存在になっているかどうか」という点があげられます。近年、大学企画の一般向けの活動が増えてきたことで、市民の人にとっても大学は少しずつ身近な存在になってきています。しかし、現状ではまだまだであると言えます。この垣根を超えるのが大学としての大きな課題の一つといえます。

第五に「教材が十分でない、時代のニーズに合った教材でない」という点があげられます。すでに上述してきたように、大学における地域活動における書籍や教材がまだまだ充実していないのが一つの課題といえます。

次に、今後の可能性については以下の2点から考えてみます。

第一に「鹿児島大学は総合大学として様々な学問分野における活動を提案できる」点があげられます。鹿児島大学が地域活動を行う点での長所は、何ととっても鹿児島大学が総合大学である点です。鹿児島大学には様々な学問の専門家がいます。そのため、活動への多様な視点からのアプローチを可能にしています。今後はこの利点をより一層活用していく必要があると考えられます。

第二に「本人の意欲があれば様々なことを行っていく

可能性がある」点があげられます。現在人生は80年を超えますが、一方で定年は60-65歳と人生の後半は十分な余暇が生まれてくるのが現状です。そのためどの人にもこのような十分な時間を利用し様々な趣味や生涯活動を行えるようになっています。この活動を有意義にするためには、定年を迎える前から計画的な人生設計をすることで、定年後の第二の人生を有意義なものにしていくことができると思います。

最後に

今まで見てきたように、現在の大学はその地域の特徴に注目しながら地域と様々な形で連携を取り、教育や研究を行ない、その成果を研究会、シンポジウム、公開講座などといった形で地域に還元しています。ここで重要になってくることは地域と連携するときに、国際的な視点で地域と世界とを関連づけ、その地域の持つ独自性を明確にすることや、最先端の研究視点から地域を眺め、その成果を地域に還元していくことと考えられます。このように国内外と比較することで地域の独自性や特徴を明確にし、それを地域の方に紹介することで、地域の方の自信や誇りの形成、そして豊かな日々の生活の構築に貢献できると考えています。